

授業で愉しむ漢詩創作(上)「七言一句から始める漢詩の指導」

愛知県立刈谷東高等学校 全日本漢詩連盟評議員 鈴木淳次

十年程前、私の漢詩創作授業の報告を本誌一八五号に載せていただきました。

その後、しばらくして、その小文を参考にして古典の授業で漢詩創作をしたという作品集(※2)を京都の高校のM先生からいただきました。高校生としての日々の思い、自分の将来への期待や不安、眼前の風物に対する若々しい感覚などが、押韻平仄ともに整った漢詩に素直に詠みこまれていて感心しました。

機会があつて、全日本漢詩連盟会長の石川忠久先生と一緒に高校を訪問し、生徒たちとの懇談の時間も作っていただきましたが、どの生徒も漢詩の実作への苦勞とともに、「最後の頃は、漢和辞典を引くことが楽しくなった」と口にしていました。

また、静岡の中学校のN先生からは昨年、体育祭をテーマに、先生ご自身が(初めて)作った絶句を用い、転句だけを空欄にして生徒に埋めさせるという句作指導の工夫、そこから自由題での絶句創作まで発展させた国語の授業実践もうかがいました。

自由題の作品集(※3)は、サッカー、ゲーム、お笑い芸人から幻想的な空想世界まで題材の幅が広く、現代の中学生の興味や関心、心の動きが感じられ、漢詩の一字一字からは「今現在の自分自身」を表そうという意欲がにじみ出てくるような思いがしました。

脚注…*1、*2、*3とも、筆者主宰の漢詩サイト「漢詩を創ろう 桐山堂」

(<http://rosando.plu.jp/>)に掲載。

漢詩創作は、基本的に唐の時代に確立された近体詩の形式に則り、韻律や文法、用語もその頃に合わせることでとされているため、実際に創作指導を試みようとしても、生徒以上に教員の方がハードルの高さを感じてしまうこと

が多いのではないだろうか。

形式の整った漢詩を完成させなくてはいけないとつい意気込んでしまいがちですが、「漢和辞典の使い方や漢文の文構造に慣れさせる」、「漢字の意味の違いを理解させる」、あるいは「漢詩の構成を覚えて読解に役立てる」など、通常の漢文指導の中の一つの方策くらいに考えて始めた方が肩の力も抜けます。

焦らずに、出来ることから始める。創作指導は長い視野で一歩ずつ手順を踏むことと、指導者も一緒になって創作の過程を楽しむことが漢詩に限らず肝要です。

本稿では、授業の数分間を利用し、生徒も教員も取りかかり易い指導例をご紹介します。平仄などの規則の話は次号とし、まずは七言の句を作つて愉しむことから始めましょう。

1 七言句のリズムに慣れる

漢詩の七言句は原則として、二字・二字・三字で切れ目ができる(二・二・三のリズム)ので、そのリズム感は理解できるように、また、押韻という形で句末の字が規定される漢詩の句作りの方法にも取り組めるようにしましょう。

「二・二・三のリズム」や押韻については、授業で漢詩を扱った時に教えていることだと思えますが、この両方を理解させるには、私は七言絶句で句の切れ目を取り除いた二十八字を示します。

月落烏啼霜滿天江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺夜半鐘聲到客船

張継の「楓橋夜泊」ですが、勿論、他の詩でも構いません。

このように漢字がずらずらと並んでいるだけでは教員でも意味をつかむことは難しいのですが、二十八字がヒントになり、七言絶句だと判断できます。そこで七文字ずつ四句に分けますと、それだけで随分意味が取りやすくなる

想像して「春風」「緑柳」「鶯声」「泉水」など、上四字に入れましょう。

この中から好みの韻脚を選び、七言句の下三字をまず決めてから上四字（二字十二字）を考えるとという形になります。

言葉が先にあり、それに自分の気持ちを合わせるような印象で、生徒は違和感を持つかもしれません。しかし、最初から自分の心を漢字で全て表そうとするのはやや欲張り過ぎで、心と言葉をつなぐ練習も必要です。と同時に、言葉によって心が開拓される経験もしてほしいと思います。

韻脚例の多くは、高校生の日常生活とはやや離れた世界を描いているかもしれませんが、全く見たことが無いものばかりではなく、記憶や知識として多少なりとも残されているものでしょう。それが言葉に触れることでイメージの中で昇華することは、予想されることではあるし、期待したいことでもあります。

とは言っても、生徒によっては見慣れない語句もあるでしょうが、それを教員があらかじめ説明するのは控えたいところです。「何となくイメージが合う」、「使っている漢字が面白い」、それでスタートとしては十分であり、その語を使いたいと思うならばきつと自分で調べ始めるでしょう。

また、同じような句ばかりができてしまうのではないかと危惧されるかもしれませんが、上四字にどんな素材を入れるか、その組み合わせ方は生徒個々で異なります。大切なのは、教員の側が似たような句からどれだけ個性を読み取れるか、です。

5 柏梁体聯句と二句一聯

ある程度の数が揃ったら、内容を考えて並べ替えてプリントします。同じ韻脚が続かないようにするだけでも、ある種のストーリーが生まれます。天候や場所、時間などの食い違いがあっても、それが逆に場面の転換になりますから、一句ずつゆつくりと読んで想像力をフルに働かせましょう。

春曉 鶯声 白梅前
雨晴 梅発 春可憐
曙光 静閑 汲清泉

草廬 戸前 雨声連
千里 遠山 雨如煙
遲日 鶯声 驚午眠

桜桃 万朶 百花鮮

風鎮 烏啼 夕陽天

このように毎句で押韻し全体を同韻で通したものは「柏梁体聯句」と呼ばれ、今から二千年も昔、漢の武帝から伝わる形式です。そのことを教えれば、生徒には漢詩の長い伝統に加わった実感が湧くかもしれません。

また、第一句と第二句、第二句と第三句、第三句と第四句というように、前後の二句ずつをひとまとまりにして連句のように読むことも、是非、試みてください。絶句の前半（起句と承句）にも見られるように、漢詩は二句を一聯としてとらえ、聯で一つの風景や心情を描き出すのが基本ですので、絶句の前半を見ているような読み方ができます。

あるいは、どの句とどの句を組み合わせると面白いか、という投げかけも良いかもしれません。

この段階ではまだ平仄は整っていませんが、素材を拾い出して、それを漢字（漢語）で表したという体験が重要です。また、二句をひとまとまりに読む感覚を身につけておくと、七言絶句の起句と承句を作る際に役に立ちます。

6 七言三句にも挑戦

更に、興味が湧いた生徒には、今度は別の韻脚で複数句作るように指導すれば、絶句完成にもう一歩近づきます。

その場合、同じ韻脚を使うこととし、各句の役割（起承転結）を具体的にするために、例えば、次のようなプリントを渡します。

七言の句は、原則として「□□ □□ □□□」と切れます

次の①～③の内容で三句、韻脚集から下三字を選んだ後、上の四字を入れてみましょう。

①「春の花や植物の様子」

□□ □□ □□ □□ □□

②「春の野山の景色」

□□ □□ □□ □□ □□

③「春を迎えた自分の気持ち」

<input type="checkbox"/>						
<input type="checkbox"/>						

※下三字については、それぞれの句で異なるものを選んでください。①②③の内容は

厳密なものではなく、目安とか目標という程度で構いません。意図としては、「起承転結」という絶句の構成を多少意識して作らせるためで、①②は起句と承句にあたるとしてある程度似た内容になるように、③は結句になると想定して全体のまとめになるような内容になるように、という指示です。実際の内容が指示と異なっても、絶句に挑戦するところまで仮に進めば、その段階でいくらでも修正はできることです。

それよりも、三句作ること、生徒が「もう少しで絶句になる」という気持ちになれることの方がはるかに意義があります。

ただし、教員の側が焦ることは禁物です。個別指導ならともかく、多数の生徒を対象にした授業では、三句を作る段階にたどり着く時間や興味関心の深さは個々に異なります。生徒の反応を見ながら、季節が変わった頃に新しい韻目で再挑戦させ、継続的に徐々に句作りに慣れるようにしていけば良いでしょう。

(以下、次号)

◆「韻目」「平仄」などの漢詩用語の説明、本稿での例示以外の「韻目韻字表」「韻脚表」については、拙著『漢詩を創る 漢詩を愉しむ』（二見書房）か、漢詩サイト「漢詩を創ろう 桐山堂」をご覧ください。ダウンロード、ご質問のメールも同サイトから。